

7 児童生徒作文

児童生徒の作品資料 1

家族の大切さ

府中町立小学校 五年児童

私は、この夏、家族の大切さや地いきの人と助け合って生きていく大切さについて考えました。2018年7月6日に災害が起きました。その日、西日本に大雨が降り、府中町にも土砂災害特別警報、ひなん勧告が発令されました。

私の家の近くでは山がくずれて土砂や水がゴーゴーと音を立てながら家の前の道路に流れてきました。そのとなりの家の人も土砂のことを近所の人に教えてもらったそうです。そのこう景を見たときに、とてもこわくなりお母さんに、

「だいじょうぶ？だいじょうぶなの？」

と、何度も言っていました。

私は、となりの家の人の話を聞いてお母さんといっしょに外に出て様子を見に行きました。すると、目の前の道路は土砂だらけになっていて、はしの方はまだ水が流れているじょうたいでした。お母さんは、雨の中カップを着て水が流れるように土砂をどけていました。その時お父さんは、じゅうたいで帰るのが遅くなっていました。後でわかったことですが、市内から府中町まで歩いて一時間半かけて帰ってきたそうです。ふだんとは違う一日だったため、お父さんに会えた時は不安がなくなり安心しました。お母さんに代わりお父さんが道路の土砂をどけていつでもひなんできるようにしました。私は、家族のために衣類や食料、ペットの用意をしました。

ここまで準備をしたにもかかわらず、その日の夜に寝ているあいだに土砂がきたらどうしよう、こわいなどおびえていました。すると、家族がいっしょに寄りそってくれたので安心して寝ることができました。

災害があった次の日に、私が目を覚ますと、お父さんとお母さんや地いきの人たちで土砂や木くずなどを片付けました。私も地いきや家族の一員としてできるかぎりのことをしたいと思い、その作業に加わりました。そして、地域の人やお父さんたちと協力してなんとか土砂を片付けることができました。

今回、土砂を片付けてみてとても匂いが強くてくさく、何よりも重いなと感じました。テレビなどで流れる映像や写真、人がうもれているというニュースを聞くたびにそのときの体験がよみがえってきて、できることなら土砂をどけて助けてあげたいと思いました。私は、その思いとともに家族の大切さと地域の人と仲良くしたり協力したりする大切さも知りました。そして、あらためてお父さんやお母さんやペット、そして何より自分の命を大切にしたいと思いました。

児童生徒の作品資料 2

大雨災害を経験して

府中町立小学校 五年児童

7月6日に私が今まで経験したことのない大雨が降りました。雨がずっとふり続いて、早く止まないかなと思っていました。しかし、何日もふり続いてだんだんとひどくなってきました。すると、お母さんやお父さんのスマホからけいほうを知らせる大きな音が聞こえました。私がこわがっているのを見てお父さんが寄りそってくれました。とてもうれしかったけど、外の様子が気になって、窓の外を何度も見ました。雨の音がうるさくてあまり眠れませんでした。

朝起きるとけいほうが出て、学校が休校になりました。テレビや新聞でもいろいろな所で大きなひ害が出ていました。こんなにたくさんのひ害が出るとは思っていなかったので、びっくりしました。この大雨でうちの近くもどこかくずれのではないかと心配になりました。

学校に行けるようになった日、今度はえのき川がはらんし、自分の町にも大きな被害が出ました。お母さんがむかえに来たときはとても安心しました。

次の日、近所の人がスコップを借りに来ました。会社の人の家が大変だったので手伝いに行くということでした。終わって返しに来た時は、汗だくでどろどろになっていたのを見て、私にも何かできることがないかとお父さんやお母さんに相談しました。お母さんは、

「少しでもいいから、自分のおこづかいでぼ金をしてみたら。」

と、言ったので少しだけだけどぼ金をしました。お父さんも

「自分の気持ちで、一つ良いことをすればきっと喜んでもらえるよ。」

と、言ってくれました。

その数日後、矢野に住むおじさんが大雨から何日もたっているのに断水をしていたので、私たち家族は水や食料やウェットティッシュなどを用意して渡しました。

「困っていたから助かったよ。」

と、おじさんは喜んでいました。なんだか私もうれしくなりました。

この災害を経験し、私たち家族は他にも災害に備えてできることを考えないといけないと話しました。そこで私は、

「バッグにウェットティッシュなど、災害に使えるなものを作ればいいんじゃない。」

と、提案しました。すると、お父さんもお母さんも、

「それはいいねえ。」

と、賛成しました。

本当はこんな災害は起きてほしくなかったけど、家族と災害の話をしたことで災害が起こる前に何ができるのかを考えることができました。今回の経験や話し合ったことを日ごろから活かし、家族と助け合って行動できるようにしたいです。

児童生徒の作品資料 3

地域のきれいの大切さ

庄原市立小学校 六年児童

私は、七月の初めに西日本豪雨が起きた時、家族と家にいました。大雨で家の近くの溝からは、水があふれて歩けないくらい道路にたまっていました。町の大きな川は橋の上まで水が増え、橋の柱には草や大きな木の枝が引っかかかっていて周りの家の床が水でつかっている状態でした。今まで見たことのない町を見てびっくりしました。

水害が落ち着いて、学校から家までの道を帰っていると、溝の底にあったゴミや小石がなくなって水が少ししか流れていませんでした。溝のその下の方にそのなくなっていたゴミや小石がたくさん集まってきていて、それだけ勢いのある水だったんだということが分かりました。プールや川遊びは楽しくて好きだけど、水害や災害は恐ろしいものだと思います。

地域にはまだ流れてきた汚水の砂が残っていて、このままほおっておいたら町の人たちが病気にかかってしまうので少し心配でした。そこで、地域の人が町をきれいにしようということで少しずつ町の掃除をしてくださっていました。

ある日学校からの手紙で「クリーン作戦」のお手紙が配られました。それを見て学校の周りをきれいにするために「クリーン作戦」のボランティアに参加することにしました。

朝から暑くて、長そで長ズボンはすごくムシムシして、汗がたくさん出ていやになりそうでした。一人一つは掃除する道具を何か持っていくように手紙を書いてあったので、私はちりとりを持っていきました。学校に行くと、私が思っていたよりたくさんの方が集まっていました。大人から子供までいました。おばさん達とグループになって行動しました。被害がすごかった川の周りがあるフェンスや道路の掃除をしました。持って行ったちりとりだけでは掃除はできなかったけれど、ほうきを持ってきていた他のグループの方が、

「一緒にやろう。」

と言って声をかけてくださいました。そして、砂や葉っぱを掃除しました。同じグループではなくても協力してやって、いろんな人たちと話ができてとても楽しく掃除をすることができました。

私がボランティアをやってよかったと思ったことが二つあります。

一つ目は、一番たくさん砂やごみがあった場所で掃除をしていたら、その近所の方が、「小学生？大変でしょう。ありがとうね。」

と言ってくださったことです。暑くて疲れていたけれど、そうやって地域の人たちに声をかけてもらいながらがんばることができました。

二つ目は、大変なことでもみんなの町をきれいにすることはとても大切なことで、消防署の方や市役所の方の気持ちが分かったことです。

私は、今回の災害のように大変なことがあった時、一人では解決できないこともみんなが協力すれば解決することができるということ、協力することの大切さを学びました。

児童生徒の作品資料 4

災害での経験から

三次市立中学校 三年生徒

今回の西日本豪雨災害で、私は人生初めての避難を経験しました。私が住む川地は、江の川が東西に流れています。今回、氾濫こそしなかったものの、江の川の支流や水路から水があふれ、浸水した場所が何か所もありました。

7月6日、午後4時。前日から降り続いた雨がより強さを増し、上流の土師ダムが放流を始めました。そして、江の川の水が増したため、近くの小学校に家族で避難をしました。最初避難所に来たときは、避難してきている人は少なかったのですが、時間が経つにつれ避難者が増え、水や食料が回って来なくなりました。

午後十時、母の携帯電話が突然鳴りました。祖父からでした。祖父の家が床上浸水したというのです。あっという間に玄関に水が入り、祖父は外に出られなくなってしまいました。その瞬間、一気に不安と恐怖が押し寄せてきました。「祖父は一体どうなってしまうのか。今、私たちのいるこの避難所は、本当に安全なのか。この雨はいつ止むのか。」誰も答えることのできない問いが頭をぐるぐると巡り、まともに寝られませんでした。

翌日、雨は弱まり、江の川の水位も下がり始め、いつもの川地の風景が戻りつつありました。しかし、テレビで見る三次の町は、私が知っている町ではありませんでした。馬洗川は土手ぎりぎりまで水かさが増しており、氾濫寸前、きりりホールは半分くらいまで浸かり、まるで湖に浮かぶ島のような状態でした。自然の力を前にしては、人は勝てず、無力なことを思い知らされました。

そして、祖父のことが心配になり、母と弟と祖父の家に向かいました。

庭には水が溜まり、玄関までたどりつくことができずでした。祖父は家の中で一人孤立していました。昼は浮き、二階に逃げようにも体を動かすのが辛く、結局ベッドの上で過ごしたそうです。身動きがとれないうえに、だんだん迫ってくる水。私だったら耐えられないその状況乗り越えた祖父は、なんと忍耐力があるのだろうと感じました。大雨が降る中、一人過ごした祖父を見つめながら、胸がしめつけられました。

そして、7月9日、あの真っ黒な空が嘘のように、西日本は梅雨明けしました。まだ被害の全体像がつかめていない、大雨の直後でした。

二日後、祖父の家の床の張り替えの手伝いに行きました。私は、掃除機をかけたり、張り替える板に印をつけたりしました。一日中暑く、やる気を削ぐような陽射しが祖父や母、私たちに降り注いでいました。

呉市や東広島市に比べれば、被害は少なかったものの、私たちも確かに被災したのだと気付かされました。今も続く避難所生活、水や食料などの物資を待つ日々、加えて災害レベルと言われるこの猛暑。一晩だけでも体にこたえたのに、いつまで続くかわからないという、行き場のない不安やストレスは、日々避難者の人々の心を蝕んでいっていると思います。さらに、親戚、知り合いの方などが死者・行方不明者に含まれているとなると、心が壊れてしまうのではないかと思います。

今回の災害で被害に遭われた方はたくさんいます。そんな方々の気持ちが少しだけわかることができた今、何か役に立ちたいと強く思います。今回の災害では、多くの高校生が泥やがれきの撤去作業をしています。私も、子どもだからと言わず、掃除・片付けなどの直接的な支援や募金、物資の供給などの間接的な支援など、何ができるのか考え、行動に移したいです。一人一人の力は小さくても少しでも支えになりたいと強く思っています。